

下村フェローシップ

五十里 寛

第 1 回目の本欄で、設備投資研究所が本年 50 周年を迎えることをご紹介した。1964 年の設立時に初代所長をつとめたのは、日本の高度成長期の著名なエコノミスト下村治博士であったが、その下村博士を顕彰して 1990 年度に創設されたのが下村フェローシップである。下村フェローシッププログラムは、わが国の経済・産業等の研究に意欲を有する外国人研究者を招聘し、設備投資研究所での研究活動や共同研究を通じて優れた研究成果を得るとともに、国際交流・相互理解を深めようとするものである。創設以来今年で 24 年目になるが、本年 4 月に 30 人目のフェローを受け入れるに至った (<http://www.dbj.jp/ricf/fellowship/>)。これまでのフェロー受入実績は、受け入れ時の年齢層 (24 歳～50 歳)、国籍 (延べ 12 カ国) と多様性があり、研究テーマもそれぞれ特色がある。研究実績は上述の HP にて公開しているので、是非閲覧頂きたい。

20 年以上にわたってプログラムを続けていくと、過去の懐かしい研究者の活躍が耳に入ったりする他、研究者自身の来日の折には設備投資研究所に顔を出してくれたりする。何れも研究分野においては一線級の教授等になられており、雑談一つとっても示唆に富む。時には行内向けセミナーで本人の研究分野の最先端の話題を提供頂いたりもする。設備投資研究所 50 年の歴史の中でも一つの重要な財産であることは間違いない。

過去のフェローの研究テーマを詳細に見ると、日本経済、日本企業の強みに学ぼうとするものが多い。「失われた 20 年」と言われる時代を経て、ややもすれば日本人が自信を失いつつあるようにも見受けられる中、海外の研究者がそこに一石を投じるような研究をされるというのは我々にとって心強い限りである。

アベノミクスが取りざたされている昨今、高度成長期の下村博士の研究が再認識される地合いも出てきている。下村博士は著書『日本経済成長論』の中で、本格的な高度成長に入ろうとしていた日本について以下のようなメッセージを出している。

「10 年後のわれわれの運命を決定するものは、現在におけるわれわれ自身の選択と決意であり、創造的努力のいかんである。この可能性を開拓し実現するものは、退嬰的・消極的な事なかれ主義ではなく、意欲的・創造的なたくましさである。日本国民の創造的能力を確信しつつ、自信をもって前進すべきときである。」

外国人研究員との交流によって、過去における日本国民の創造的努力を再確認しつつ、「前」へ進む。日常の中でもそういった姿勢を持って過ごしていければと思うところである。

2014 年 4 月 7 日